

保育実習園が実習生に求めるもの —「積極性」に注目をして—

Nursery Teachers' Needs for Preschool Teacher Trainees: Focusing on 'Activeness' of the Student

北野 富美子^{*1} 塩津 恵理子^{*2} 藤原 伸夫^{*3}
山口 香織^{*4} 佐藤 智恵^{*5}

要旨

本研究では、公立保育所で働く保育者を対象にアンケート調査を実施し、併せて公立保育所長にインタビュー調査を行い、実習園が考える「学生の積極的な姿」から今後の実習指導の在り方について検討を行うことを目的とした。その結果、アンケート調査からは「実習生の実習態度」の努力を必要とする点では、積極性の項目が81%と突出して高い数値となったことが明らかになった。保育者が積極性をどのように捉えているかについては、「積極性」に焦点化したインタビュー調査の分析によって描き出した。その結果、(1). 実習生からの質問や疑問を聞いてくれることが少なく、発信する力が弱い、(2). 自ら学ぼうとする意欲を感じにくい、(3). 「言われたからする」という姿勢が強く、「自分ならこうする」「こうしてみたい」という意識が乏しい、の3点が浮かび上がった。

キーワード：保育実習 実習指導 積極性

I. 問題と目的

現在、保育・幼児教育において、子どもの非認知的能力を育てることや主体的・対話的で深い学びを行う保育実践に関連し、保育の質の重要性が話題になることが多い（例えば大豆生田，2016）。それは、平成29年に改訂された保育所保育指針の中でも「自らの保育実践を振り返り、自己評価することを通じて、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない」（厚生労働省，2017）と記されていることから分かるように、保育者には学び続ける姿勢が求められ、質の高い保育を行うことが喫緊の課題だとされている。それは、資格免許取得のために保育者養成課程で行われる養成教育においても同様で、教員それぞれが様々な工夫を行い、よりよい保育者の養成が指向されている。

そのような中、学生にとって自己の保育実践力と向き合う機会となる実習に関して、様々な研究が行われている。実習における自己の保育を振り返り、それを改善する習慣を身につけるなど、質の高い保育実践が行える学生の養成が求められているのである（秋山，2019）。例えば、森（2014）は、実習特有の学習環境の中で、実習生が子どもや指導者など保育の場での人との関わりを通して、自己の価値観を見つめなおす機会となっていると述べている。そして、

*1 神戸市こども家庭局子育て支援部事業課 指導研修担当係長

*2 神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科 教授

*3 神戸親和女子大学発達教育学部福祉臨床学科 教授

*4 神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科 講師

*5 神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科 准教授

学生の質が多様化している中で「どのような人材を育てるか」ということは「保育の質をどのように担保するのか」ということであるとし、養成校と保育現場の連携によって実習教育の充実が重要であるとも述べている。藤崎ら（2018）は、幼稚園教育実習の事前・事後指導の在り方を検討するために、実習前後に質問紙調査を行っている。その結果、子ども理解や保育者としての力量は実習前よりも実習後に有意に高くなること、実習を経て各自の課題として認識される内容は「個別の援助・保育技術」「教師の在り方」が中心であることなどであることを明らかにした。

実習は、学生にとっては初めて「保育者」として振る舞わねばならないことから新規の経験が多く、そのために時として困難さを感じる可能性も高い。そのため保育実習の中で直面した困難さに注目した研究も行われている。林ら（2017）は、保育実習を経験した学生が、子どもとの関わりでうまくいかなかったことに焦点をあて、エピソード記述を分析している。その結果74のエピソードが、「コミュニケーションの取り方」「けんかの仲裁」「注意を必要とする場面での対応」など13カテゴリーに分類されたことを報告している。宮里（2017）は短期大学生の実習の困難感について明らかにするとともに、その比較対象として保育士をも対象としたアンケート調査を実施している。その結果、学生が感じる困難感については、「指導案・日誌・観察記録の書き方」が最も高く、次いで「子ども対応困難感」、「職員対応困難感」となっていると報告している。加えて、保育士の方が短期大学生よりも「保護者対応困難感」と「職員対応困難感」が有意に高いことを述べた。

そもそも、このような学生を実習生として受け入れる際、保育者らは実習生にどのような姿を求めているのだろうか。池田ら（2010）は、保育現場が求める実習生像を明らかにするために214名の保育者を対象に質問紙調査を実施している。対象者の内訳としては、私立幼稚園で働く保育者34名、私立幼稚園52名、公立保育所52名、私立保育所67名、不明2名となっている。その結果、実習生に求めるものとして「学ぶ姿勢・態度」と「保育実践のスキル」にまとめられたと述べている。加えて、「学ぶ姿勢・態度」については、私立園で働く保育者のほうが、公立園勤務者よりも「実習生に必要である」と考えていたことを明らかにしている。石川ら（2018）は、保育士・幼稚園教諭実習生が実習までに備えてほしい資質および技術・技能について、実習園の園長等を対象とした質問紙調査を行っている。その結果、保育者としての「資質」に関する項目の方が、「技術・技能」の項目と比較して有意に高い結果となったと報告しており、実習生を指導する際に、技術・技能よりも保育者としての人間性を重視しているということが明らかにされた。「資質」の内容としては「情緒が安定している」「子どもが好き」「清潔」「人柄」「責任感」の順に項目が高かったということである。「技能」については、「幼児への接し方」「乳児への接し方」「文章作成能力」「遊びの種類の豊富さ」「ピアノ演奏」の順であったと述べられている。

本学保育実習における実習園からの学生に求めるものに関しては、塩津・山口（2017）により既に調査が行われている。それによると、実習園が感じている本学学生に「努力が必要な点」として35.9%の園から「積極性」が挙げられたことを報告している。これは他の項目と比して高い数字であり、本学学生は、真面目であるものの積極性に欠けるという特徴があるということが明らかにされている。これは他の先行研究結果とは異なるものであり、そこには、保育者

養成校ごとの校風や風土、雰囲気依る部分も少なからず影響があると思われ、保育者養成ごとの検討の必要性が示唆されるものである。また、「積極性」という点においても、様々な学生の姿が想像され、実習園が求める「積極性」というものを具体的に明らかにする必要があるだろう。

そこで本研究では、塩津・山口（2017）で使用したアンケート調査を再度実施し、併せて保育者にインタビュー調査を行い、実習園が考える「学生の積極的な姿」から今後の実習指導の在り方について検討を行うことを目的とする。今後、調査を継続させていく予定であるが今回の調査ではひとまず、公立保育所で働く保育者を対象とする。その理由として、「積極性」という文言は多面的な方向から検討可能な言葉である。例えば「元気のよさ」であったり、「子どもとの関わり方」であったり「保育者への質問の多さ」などである。それは、園の保育方針や実習指導への姿勢とも密接であることが考えられる。私立園は、それぞれの園により理念や実習指導方針が様々であることから、今回は保育者の考え方がある程度統一されているだろう公立保育所において調査を行うものとする。

II. 研究の方法

1) アンケート調査

ある市の公立保育所（57か所）の所長会開催時において、研究の趣旨と調査内容を書面と口頭で説明した。その後、各所長に対して調査協力を依頼し調査票を手渡した。

調査内容は、実習生の実習態度及び保育技能に関して、「よい点」と「努力が必要な点」をその他を含む12項目から2項目を選択するように求めた。また、「努力を必要とする点」の具体的な内容については自由記述での回答を求めた。

調査期間は、2019年9月4日～20日とし、調査票は無記名方式を用いて郵送法によって回収した。配布依頼数57部に対して返送は31部、回収率は54.4%であった。また、調査者に返送された質問紙を研究協力の同意が得られたものとして取り扱った。

2) インタビュー調査

2019年12月3日～10日までの間に、ある同一の自治体で働く公立保育所の所長5名に対してインタビュー調査を行った。

インタビュー内容は、対象者の許可を得て、ICレコーダーに採録し、その後逐語録を作成した。本研究では実習生の「積極性」に焦点をあて、対象者の語りから積極性の具体的な内容を抽出して質的に分析した。なお、このインタビュー調査実施と分析は、執筆者の一人である北野が担当した。北野は、調査に協力いただいた自治体で長く勤務していることから、5名の保育所長とも十分な信頼関係が構築されており、インタビューの本音がある程度表出されていることが予想される。

対象者の属性と、インタビュー実施日時は以下のとおりである。なお、実施場所は承諾を得て市役所会議室にて行った。

(1) 保育所長A・・・保育者経験38年（うち、所長としての経験9年）

実施日時：2019年12月3日 13時30分～13時50分

- (2) 保育所長 B・・・保育者経験35年（うち、所長としての経験 7年）
実施日時：2019年12月 5 日 16時30分～17時00分
- (3) 保育所長 C・・・保育者経験40年（うち、所長としての経験 8年）
実施日時：2019年12月 6 日 17時00分～17時20分
- (4) 保育所長 D・・・保育者経験42年（うち、所長としての経験13年）
実施日時：2019年12月10日 17時30分～18時00分
- (5) 保育所長 E・・・保育者経験40年（うち、所長としての経験13年）
実施日時：2019年12月 9 日 13時30分～14時10分

Ⅲ. 結果及び考察

1) 公立保育所へのアンケート調査の分析

(1). 実習態度に関する項目「積極性」の結果

アンケート調査を実施した「実習に関するアンケート」のうち、公立保育所への実習生の態度に関する調査結果は図1のとおりである。

「実習生の実習態度」のよい点では、積極性、コミュニケーション、責任感の項目が0%となっている。逆に「実習生の実習態度」の努力を必要とする点では、積極性の項目が81%と突出して高い数値となった。次いでコミュニケーションが39%であったが、積極性とは大きな開きがある。また3番目に高い数値は明朗性の13%となっている。

前回調査（塩津・山口，2017）の努力が必要とする点で、積極性が35.9%（私立園を含む）であったのに対して、今回の調査結果では倍以上となった。項目では積極性、コミュニケーション、明朗性の上位3項目は変わっていない。

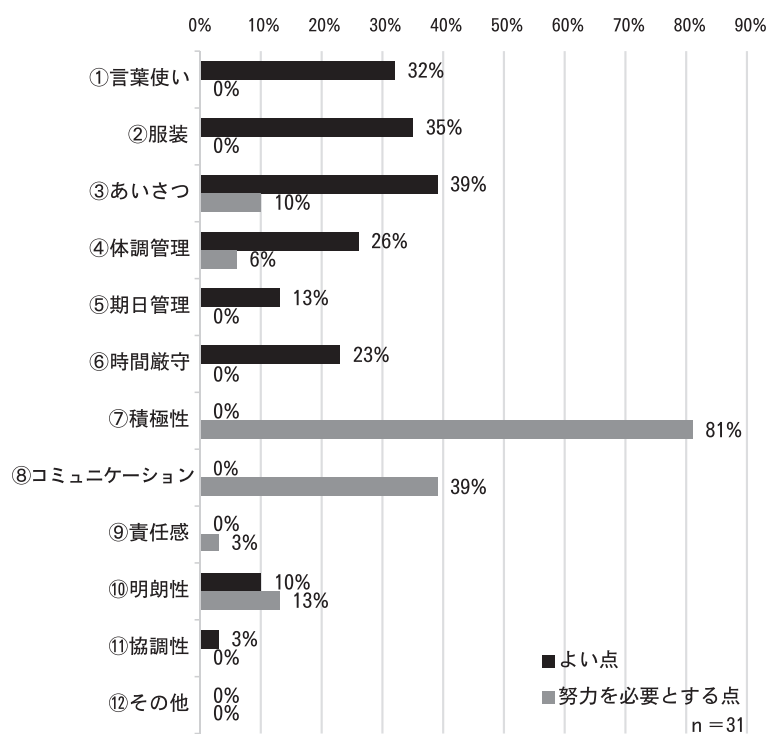


図1 実習生の実習態度

(2). 公立保育所の本学学生に求める「積極性」とは

公立保育所で働く保育者のアンケート調査から前回と変わらず積極性が求められていることが分かったが、ではその意味する内容はどのようなものであろうか。

「努力を必要とする点」で自由記述欄に書かれた意見の中で、積極性に関するものを取り上げると「自ら学ぼうとする姿勢」や「自ら子どもに関わろうとする姿勢」を求める意見や「学ぼうとするバイタリティや意欲に乏しい」などの記述があった。また、技術的に劣ることや仕事への理解不足は当然であるが、子どもにこうしてあげたいという気持ちを強く持って実習に臨んでほしいという意見も頂いた。実習生が自ら質問してこないという意見もあった（表1）。

表1 実習生の努力を必要とする「積極性」に関する内容（自由記述からの抜粋）

n=31

- ・学ぼうという意欲で実習に臨んでもらえればよいと思います。
- ・分からないことがあればどんどん質問し、自分がやりたいと思っていることに対していろいろな案を考えるなど、もっと積極的になってほしいと思います。
- ・真面目で一生懸命だが、もう少し自分の方から質問し「こんなことがしたい」などがあればよい。
- ・おとなしく、実習の中でいろいろなことを経験して学ぼうとするバイタリティや意欲に乏しいように見受けられる。
- ・技術的に劣ることは当然であり、また仕事への理解といったことが不足するのも当然のことであると思います。しかし言われたからやるといった姿勢から一歩進んで自分ならこうする、子どもにこうしてあげたいという気持ちを強く持って実習に臨み、自らをアピールしてほしいと思います。
- ・緊張もあり積極的に質問相談が出しにくいのか、こちらからの指導になることが多い。
- ・自分が得意とすることを持って実習できれば学びに厚みが出ると思う。
- ・「自ら学ぼうとする姿勢」「自ら子どもに関わろうとする姿勢」は大切にしてほしい。

実習を終えた学生への面談では、緊張したことで積極的に動くことができず、指示待ちになってしまったことや、保育者への質問のタイミングを掴みきれず遠慮してしまったという反省を耳にすることがある。学生は、事前指導等を通して積極的に実習に取り組みねばならないことは認識しているのである。しかし、実際の実習の場に立つと委縮してしまうことが考えられる。

実習生が保育実践の場に臨むことは、実習生だけでなくそれを受け入れ指導する立場である保育者にも様々な影響を及ぼすことが考えられる。その視点から研究を行ったものとして、井口ら（2019）は、実習指導の経験が保育者自身の保育の質向上に与える効果を明らかにするために、公立幼稚園・保育所で働く保育者を対象にアンケートとインタビュー調査を行っている。その結果、実習指導が保育の質向上に与える効果として、①保育を言語化し省察を行う機会となること、②学生の前向きさに刺激を受ける、③全職員の連携が図れるなどを報告している。学生の質の多様化という面では、佐々木ら（2018）が、「保育実習生が望む励ましの言葉」という視点から研究を行っている。そこでは、『「先生」「子ども」から』、『「激励」「共感」「子どもの気持ち」「称赞」「視点提示」の言葉をもraitたい』という2側面からのカテゴリーを提示し、学生が実習中に望む励ましの言葉について明らかにしようとした。その結果、学生らは「子ども」からの「子どもの気持ち」に関する言葉が最も励ましになることを報告している。ここからは、実習生を受け入れる側にとって、学生が単に「学習者」というだけでなく「どう指導するか」ということを考慮しなければならない存在になりつつあることがうかがえる。

このように保育者養成校として実習生を送り出す側と、実習園として学生を受け入れる側が、

今回のようなアンケート結果等を通して、実習生の保育実践の場に臨む心理をよく理解し、双方向から学生の意欲を引き出せるような関わりが必要である。

2) 公立保育所長へのインタビュー調査の分析

5名の公立保育所長に、実習生の「積極性」や「意欲」が不足していると感じられる点について質問を行い、具体的に語ってもらった。

保育所長A：「実習評価を気にするため、観察した子どもの様子を記録することで精一杯で、保育者の意図を探ろうとすることがほとんどなかった。忙しくしているため、聞きにくいと感じているのではないかと思い、こちらから声をかけると質問を出してくれることはあるが、実習生からの発信は少ない。」

保育所長B：「保育技術が劣るのは当然のことである。保育のどこがポイントなのか、どこが大切のかを教えていく必要があると感じる。そのために実習生との時間を作り話し合う中から、疑問が生まれ追及する気持も芽生えてくるのではないかと思われる。1回目の実習の反省を踏まえて、2回目の実習の時は、こんなところを頑張ってみようという目標を立てていくと意欲も出てくるのではないか。」

保育所長C：「真面目で一生懸命実習に取り組んでいるが、「こんなことをして見たい」というような気持が持てると、実習生自身も保育を楽しめると思う。言われたからするということから、自らやってみようとする意欲を持ってほしい。個人差があると思われるが、子どもと接する機会が少ないのか、子どもへの関わり方がぎこちなく感じることもあり、積極性に欠ける一因ではないかと思われる。」

保育所長D：「オリエンテーションに時間をかけ、実習するクラス配置や子どもの発達、遊びの取り組み状況など具体的に伝え、イメージを膨らませることも必要。時間が許せば見学して帰ると安心して準備に取りかかれるのではないかと思う。実習を受ける側も実習しやすい環境を整えることを心がけたい。」

保育所長E：「実習反省会の時には、年齢に合った遊びが分からなかった、喧嘩の仲裁の仕方がわからなかったと意見は出てくるが、その時すぐに聞くことがないので、気になることは追及してほしい。学んできた子どもの発達と、実際の子どもの姿とを照らし合わせながら学ぶ視点を明確にすることも大切ではないか。」

5名の保育所長のインタビューから、「積極性」のどのような点が不足しているのかの一側面が浮かび上がった。所長Bのインタビューからは、保育技術的なことは、経験を重ねていくと積み上がっていくという意見が聞かれ、保育に向かう姿勢・意欲に「積極性」が必要と思われるという語りがあった。5名の語りから学生の特徴として、以下の3点が考えられる。

(1). 実習生からの質問や疑問を聞いてくるのが少なく、発信する力が弱い

所長A・Bからの意見から「質問がない＝意欲がない」というわけではないが、質問をするタイミングが分からない場合もあるのではないかと考えられる。忙しい中で、実習生なりに気を遣っていることもうかがえる。指導者の方から一声かけることも大切だと考える。

(2). 自ら学ぼうとする意欲を感じにくい

実習では、養成校で学んだ理論と照らし合わせながら学びを深めていくことから、子どもを観察し記録することは実習生にとって重要な学びである。所長Aのインタビューから、実習生の中には、子どもの姿を記録するだけに終わり、保育者がなぜこのように保育を展開したのか、子どもへの関わり方の意図を探ることや、学んできた子どもの発達と実際の子どもの姿に違いを感じた時など、追及する意欲が感じられないケースがあったようである。

(3). 「言われたからする」という姿勢が強く、「自分ならこうする」「こうしてみたい」という意識が乏しい

所長Aも言っているように、学生の中には実習評価を気にするため、無難に実習を進めようとする気持ちが強く働き、このようにしてみたいという意欲や勇気が持てない中で実習を行うものもいるようである。その中でも自分が得意とする部分で、試行しようという意欲や、指導者に相談するという気持ちが持てれば、学びに厚みが出るのではないと思われる。

IV. まとめ

今回の研究では、長年公立保育所において勤務してきた保育者と、保育者養成校において保育実習を担当する大学教員が共同で調査を行った。そのため、実習生を保育実践の場へ送る立場と受け入れる立場の両面から、分析を行うことが可能となった。実習生を受け入れ指導していくことで保育者は自らの保育を振り返り、実習記録などから気づきを得て、保育の質の向上を図ることができる。今回の調査から、実習を受け入れる側に工夫・改善しなければならない点があることが考えられた。

1点目としては、実習生が不安なく安心して実習が行えるようオリエンテーションに十分な時間を費やしていないことが推測される。保育所の理念や方針、目標、全体的な計画や指導案など大まかな説明はしているものの、実習記録の書き方、留意点、どこにポイントを充てるか、指導案の作成の仕方などは、実習開始後に配属クラスの指導者が行っているという声が聞かれた。オリエンテーションの持ち方を考え、学生が十分に事前準備を行い、実習を楽しみに臨めるよう気持ちに余裕ができれば、「積極性」につながるのではないと思われる。

もう1点は、日々の実習の振り返り時間が短いことも学生の積極性と何らかの関係があるのではないと思われる。一般的に、公立保育所では実習振り返りを子どもの午睡時間中に行うことが多いが、行事や保育準備、会議などで思うように時間が取れず、実習生も忙しいから仕方がないと、遠慮気味になって質問する機会を逃していることもあるようだ。実習生が質問しにくい環境を作ってしまうことも「積極性」に欠ける一因だと思われる。理論では語れない保育の奥深い学びを感じとれるように、学生だけに「積極性」を求めるのではなく、実習を受け入れる保育所としても、学生が養成校で学んできた理論や技術を十分発揮できるよう環

境を整えることが必要ではないだろうか。

そもそも学生が積極的に言動できていない背景として、近年の社会環境が大きく変化していることも考えられる。少子高齢化社会で、直接子どもと接する機会が少ないことに加え、自分より年上の人と関わることも少ないことが、人と関わることに苦手意識を持っているのではないか。また、自己肯定感が低かったり、自分のしていることに自信が持てず、行動に移すまでに時間がかかる学生も少なくないことも考えられる。SNS等の普及により直接対話することが減少し、対話的なコミュニケーションを図ることの難しさや経験不足も背景にあると思われる。

養成校で得た基礎的な知識・理論や技術を、保育現場に参加しながら体験していくことで保育に必要な力を身につけていくことが実習の大きな目的でもある。保育現場で多くの子ども、保護者、保育者に会い保育することの喜びを感じたり、難しさを感じることも学びの一つである。「積極性」の捉え方は多方面に及ぶと考えられるが、今回の調査やインタビューから見てきたことは、保育現場からは、学生たちの「コミュニケーション能力を高める」ということではないか。保育者として身につけておくべき保育の知識や技術も必要であるが、保育者として保護者支援や子育て相談などの業務も大切な役割である。相手の話を傾聴し、多様な人と円滑に会話できることが重要になってくる。今後、社会人として経験を重ねることで身につくこともあるが、これから養成校において「コミュニケーション能力を高める」ためにできることは何かを考えていくことで、実習指導の在り方も見えてくるのではないかと思われる。

参考文献

増田まゆみ・小櫃智子（2018）保育園・認定こども園のための 保育実習指導ガイドブック 中央法規出版社

引用文献

大豆生田啓友（2016）「対話」から生まれる乳幼児の学びの物語ー子ども主体の保育の実践と環境ー. 学研教育みらい, 14-16.

厚生労働省（2017）保育所保育指針

秋山真奈美（2019）幼児教育職務実践力尺度を精査する：現職の幼稚園教諭は実習生に何を期待するのか. 佐野日本大学短期大学研究紀要, 30, 43-52.

森知子（2014）保育者養成実習における学習環境の特性：保育者ー実習生関係を考える. 聖和論集, 42, 23-30.

林幹士・田中麻紀子（2017）保育実習で学生が子どもとのかかわり度うまくいかなかったことは何かー保育実習ⅠAにおけるエピソード記述の分析からー. 夙川学院短期大学 教育実践研究紀要 10, 70-80

宮里新之助（2017）児童教育を専攻する短期大学生の実習における困難感の調査研究ー保育士との比較を通してー. 鹿児島女子短期大学紀要, 52, 145-152.

藤崎真知代・松永あけみ・津川藍・杉山雅俊・井陽介（2018）幼稚園教育実習を通じた学生の学び：実習指導の効果. 明治学院大学心理学紀要, 28, 33-47.

井口眞美・井上宏子・山下晶子（2019）実習生を指導する経験が保育者自身の保育の質向上に与える効果ー幼稚園・保育園実習において大学が果たすべき役割を探るー. 実践女子大学 生活科学部紀要, 56, 51-59.

佐々木典章・島内智秋（2019）保育実習生が望む励ましの言葉に関する一考察. 東北女子短期大学紀要, 57, 9-15.

池田幸恭・伊藤玲奈・岩崎淳子・大神優子・北村裕美・駒久美子・佐野裕子・島田由紀子・眞鍋久美好・鈴木みゆき・高梨一彦（2010）保育現場が求める実習生像の分析. 和洋女子大学紀要, 50, 177-186.

石川拓次・長澤貴（2018）保育士・幼稚園教諭実習生に求められる資質および技能についての一考察. 鈴鹿ら大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編, 1, 249-272.

塩津恵理子・山口香織（2017）保育実習指導のあり方を考えるⅠ：実習先（保育所）のアンケート調査から見てきたもの. 神戸親和女子大学児童教育学研究, (36), 55-64.